愛知教育大学教職キャリアセンター紀要第6号, pp.113～122,March,2021

感性教育実践のための基礎的研究

北川祥子※　　川上昭吾※※

※　武豊町立緑丘小学校
※※　愛知教育大学名誉教授

Basic study of the sensitive education to practice in school lessons

Shoko KITAGAWA※　　Shogo KAWAKAMI※※

※　*Midorigaoka Primary School, Taketoyo, 430-2389, Japan*

※※ *Professor Emeritus, Aichi-University of Education, Kariya, 448-8542, Japan*

感性教育を小学校の各教科で行うために、先ず「感性とは何か」を調査した。その結果 61 件の文献があった。それらの感性についての説明を一覧に示した(表１)。さらに、感性の説明が各様であったため整理した(表２)。次いで、感性教育を小学校の教員が実施するための各教科における指導例を示した(表３)。最後に感性の評価について、感性教育の指導のポイントは「感動体験」であるから、評価は子どもが感動を表出した場面を指導者がキャッチすべきであるとする方針を示した。

Keywords:　感性教育　感性の定義　感性の指導方法　感性の評価方法

はじめに

感性は人が物を感じたり思ったりする初発の心の動きであり、主体的、創造的な人間にとって大切である。哲学者の中村雄二郎(1975)は人間性の基盤・エレメントであると述べている。筆者らの一人川上は自然体験を通して感性を育てることを提案している(1984)。1996 年の中央教育審議会答申では、「生きる力は、理性的な判断力や合理的な精神だけでなく、美しいものや自然に感動する心といった柔らかな感性が含まれる」として、感性は生きる力の大切な要素と指摘されている。

人間にとって大切な感性を育てるために学校教育でどのように進めていったらよいのだろうか。小学校の教師は全教科を担当するだけに教科の目標の中に感性教育の目標と方法をどのように落とし込んでいくのかわかりにくい。

本研究はこの点に注目し、小学校の教師が教科の指導を通して行う感性教育の理論と方法を提案することを目的とする。

筆者の一人北川は、これまでの感性教育研究の経過を整理する作業を行った（教科教育学会誌、投稿中)。

本論では、先行研究で点検した文献で感性という言葉の使い方が多様であったので、先ずそれの検討を行う。次いで、小学校の各教科で感性教育を実施するための基本的な考え方を明らかにする。

第１節 「感性」の定義の検討

１　文献の検索

小学校の各教科で感性を育てる教育を進めたいと考え、感性教育の文献を「CiNii-Articles」を利用し、「感性、教育」のキーワードで検索した（2020 年 11 月 1 日実施)。その結果、感性教育に関係するものは 823 件であった。さらに、確認できた文献から感性を定義し

た文献を選ぶと、論文が 39 件、本が 20 件であった。この中に学習指導要領と事典の定義が入っていなかったためこの 2 件を加えると、感性の定義を記述した文献は 61 件となった。

それらを一覧にしたのが表 1 の第 2 列の「著者」と第 3 列「定義」である。ここに明らかなように、61 件の感性の定義は、文章上は 61 通りと同じものは一つとしてなかった。

感性が多様であるということは目指す方向も定まらないことになる。これではどの定義を使うべきか迷うことになる。

そこで、次の項のように感性の定義を整理することにした。

2　共通する意味の抽出

「感性の意味が人によってかくも違うものであろうか」、「意味は同じであって欲しい」という思いから、多様な感性を定義する文章から共通する意味を求めた。

感性についての最初の論述を行ったカントの『純粋理性批判』(1781)を見ると、そこには「我々が対象から触発される仕方によって表象を受け取る能力」と極めて簡潔に定義されている。この定義は抽象的、一般的で「広義」である。

そこで、カントの定義を原理・基準におくことにした。

そして、表 1 にある各定義について、カントの定義に一致するか、それ以外であるかの観点で区別した。区別した結果は表 1 の第 4 列目の「分類」の欄に記した。

「分類」の欄の意味は以下のようである。

（1-a）「広義な定義」

カントの定義と事典の定義は抽象性が高く、普遍的である。普遍的であるからこれを「広義な定義」と分類した。

そこで、カントの定義と事典の定義と類似する定義、すなわち「我々が対象から触発される仕方によって表象を受け取る能力」に似た表現の定義を同類と考えた。

例えば、表 1 の上から 4 行目の岡林洋（1985）(No. 4)は「ものを外界から受動的に受け取る能力」とし、表 1 上から 5 行目の石野真 (1985) (No. 5)の場合は「人間の生き生きとした目と心がとらえる力」としている。

この二つの定義とも、カントの「表象を受け取る能力」と意図するところは同じである。そこで、これらを「広義な定義」とした。

「広義な定義」に該当する文献は 37 件であった。

（1-b）「広義な定義」の一部として「広義な定義に新たな意味を加味した定義」

「広義な定義に新たな意味を加味した定義」は、著者が「広義な定義」に著者独自な意味を加えて独自な定義を使っているものである。

例えば、表 1 の上から 6 行目の春田正治(1987)(No. 6)の場合は感性を次のように定義している：「感性とはより高い人間的価値の実現を志向する感覚の性能の良さ一新鮮さ、鋭敏さ、正確さを意味することば」。この文中の「感覚の性能の良さ」はカントの定義に一致するが、それに次ぐ一句に「新鮮さ、鋭敏さ、正確さを意味することば」が加わったことでカントの定義に新たな意味が加味されている。そのため、この定義は「広義な定義に新たな意味を加味した定義」に該当する。

これは、「広義な定義」に含めて考えることもできるが、著者によってあらたな意味づけが少しずつ加えられているため、敢えて新しい項目をたてた。

これに該当した著作は 8 件であった。その中には、福岡教育大学教育学部附属小倉小学校(1994)、筑波大学附属小学校（1997）、新潟大学教育学部附属長岡小学校(1997)、山形県村山市立西郷小学校（1997）、および相模原市学校教育研究開発グループ（1997）の 5 件の学校の研究が含まれる。

（2）「独自な定義」

「独自な定義」とは、それぞれ著者独自な説明がされているものである。すなわち、前述の「広義な定義」と「広義な定義に新たな意味を加味した定義」に該当しない定義の仕方である。

これに該当する著作は 16 件であった。

例えば、表 1 上から 3 行目の山本正男 (1981) (No. 3)の定義は次のようである：

① 理論的な見地における意味づけ。感性は対象から触発される仕方で表象を獲る受動的能力。

② 実践的意味づけ。われわれの本能とか、さまざまな欲求・性向・激情といった、いわゆる自然本性の要求全体。

③ 美的意味づけ。この見地では、感性は単なる受容能力を超え、それ自体能動的な直感的認識ないしは視形式として芸術創造を導くことになる。

ここでは「感性は対象から触発される仕方で表象を獲る受動的能力」をあげているが、これは広義な定義に合致する。山本はさらに、「実践的意味づけ。われわれの本能とか、さまざまな欲求・性向・激情といった、いわゆる自然本性の要求全体」と、さらに「美的意味づけ。この見地では、感性は単なる受容能力を超え、それ自体能動的な直感的認識ないしは視形式として芸術創造を導くことになる」を追加して説明している。このことから、山本の定義は「独自な定義」とした。

これに該当したものは前述のように 16 件であった。

次に、（1-a）「広義な定義」、（1-b）「広義な定義」の一部として「広義な定義に新たな意味を加味した定義」、及び (2) 「独自な定義」を整理し、表 2 のようにまとめた。

表１　感性の定義について記述のある著作、及び定義の分類

No.	著者	定義	分類
1	カント（1961）	我々が対象から触発される仕方によって表象を受け取る能力を感性という	**広義な定義**
2	『哲学事典』(1971)	認識論上は悟性と対立し、認識に欠くことのできない能力をいう。実践的意味においては、身体的感覚に関係した全衝動にもとづく自然的欲求のことをいう。心理学的には、身体がうける刺激により、それに対応した感覚内容を生ずる場合、その働きの鋭敏さの度合いについて語られる。	**広義な定義**
3	山本正男（1981）	①理論的な見地における意味づけ。感性は対象から触発される仕方で表象を獲る受動的能力。 ②実践的意味づけ。われわれの本能とか、さまざまな欲求・性向・激情といった、いわゆる自然本性の要求全体。 ③美的意味づけ。この見地では、感性は単なる受容能力を超え、それ自体能動的な直感的認識ないしは視形式として芸術創造を導くことになる。	**独自な定義（詳細に記述）**
4	岡林洋（1985）	ものを外界から受動的に受け取る能力	**広義な定義**
5	石野真（1985）	人間の生き生きとした目と心がとらえる力	**広義な定義**
6	春田正治（1987）	感性とはより高い人間的価値の実現を志向する感覚の性能の良さー新鮮さ、鋭敏さ、正確さを意味することば	**広義な定義に新たな意味（人間的価値）を加味**
7	日本教育方法学会（1989）	人間的感性という言葉を次のような分かちがたい二つの側面からなる「価値への感受性」としておく。 A 自己愛を起源とするものとして　生物ー社会的な存在である人間の欲求をみたしてくれるものとしての価値への感受性である。 B 社会化され制度化されるものとして　社会ー文化的な存在である人間へと発達する過程で、欲求が社会化され制度化されてゆくのにつれて変化する、価値への感受性である。	**独自な定義（詳細な定義）**
8	片岡徳雄（1990）	感性とは「価値あるものに気づく感覚」	**広義な定義**
9	小林宏（1990）	感受性が刺激という形で受けとる情報を判断し認識する力が感性である	**広義な定義**
10	石川毅(1991)	色や形の連鎖の向こうに見えるもの	**広義な定義**
11	宮脇理、他（1993）	物事の価値および質について主体的に気づき感じとる力	**広義な定義**
12	金子光明、他（1993）	感性とは、刺激を感覚器官によって受容したものに対する心の動き	**広義な定義**
13	川上昭吾(1994)	感性とは、外界の全ての情報に対して感覚と知覚と感情を総合して感じる人間の感じ方の敏感性である	**広義な定義**
14	福岡教育大学附属小倉小学校（1994）	学習刺激を受け止める感覚、そこから生まれるイメージ、行動をひき起こす意欲や価値にふれた感動や成就の喜び等の人間らしい感情の働き・動き、そして、他者の身になりかわってその感情や考えを受け止める共感のこと	**広義な定義に新たな意味(教育的意義)を加味**
15	井上勝子（1994）	感覚、感受性、感情を合わせて「感性」という	**広義な定義**
16	高橋清（1994）	音楽の価値をみずみずしく、鋭敏に、しかもしなやかで、奥行きをもって感じることができる態度・能力	**広義な定義**
17	飯田健夫、他（1995）	外界の刺激が感覚受容器に伝えられた後発生する③～⑥までの一連の情報の流れを、広義の感性と定義したい。図にて説明。	**独自な定義（詳細な説明）**
18	遠藤友麗（1996）	感じて生きる人間の特性で「心に真・善・美などの価値を感じ取る力」	**価値を付与**
19	筑波大学附属小学校（1997）	感性とは、子ども自らの豊かな感受性を軸に、価値あるものを見出す感覚や感情であり、理性と相互に働き合って自己実現をめざすものである	**広義な定義に新たな意味（価値）を加味**
20	新潟大学教育学部附属長岡小学校(1997)	学びの対象や仲間に向かって働きかけ、認識を獲得していく際に、物ごとの価値・他者の思いを主体的に感じ取り、実感や納得を内面からさせる力	**広義な定義に新たな意味（教育的意味）を加味**
21	山形県村山市立西郷小学校（1997）	よりよいものをよいと感じる心、その子なりの感じ方、価値あるものに気づく感覚、より高いものを求めようとする感情や態度、主体的に追究しようとする意思	**広義な定義に新たな意味（教育的意味）を加味**
22	相模原市学校教育研究開発グループ（1997）	自分を取り巻く状況に敏感に反応し、価値あるものを感じ取ることができる心の動き	**広義な定義に新たな意味（価値）を加味**

表１（前ページからの続き）　感性の定義について記述のある著作

No.	著者	定義	分類
23	沢田利夫（1997）	心理学的には刺激に対する感覚的反応の鋭敏さの程度	広義な定義
24	黒田耕誠（1997）	図にて説明	独自な定義（詳細な説明）
25	L・フェーヴル、 他（1997）	十七世紀には、この語は、論理的領域の印象に対する人間のある種の感じやすさを特に指すように思われる。真に対する、善に対する、快楽に対する感性、といったようにしばしば使われるわけである。十八世紀には、この語は、人間的感情―憐れみ、悲しみ等々の感情をいだくある特殊な仕方を指す	独自な定義（詳細な説明）
26	石川佾男、他（1997）	感性を教育的な意味あるものとしてとらえるときには、受動的な面だけではなく、能動的な面との両面から考えることが必要なのである。教育的な意味のある感性を模式的に定義すると次のようになる。感性＝感情・感覚（受動、受容）＋個性（能動、表出）	広義な定義に新たな意味（感動）を加味
27	高橋史朗（1998）	感性は人間にとってホリスティックな総合的な能力。感受性が刺激という形で受けとる情報を判断し認識し価値を感じ取る心の感受力が感性である。感受性は刺激に対する鋭敏性を意味する	広義な定義
28	桝岡寿江（1998）	自分を取り巻く環境や状況に対して敏感に反応し、価値あるものを感じることができる「心の動き」	広義な定義
29	小林美実（1998）	感性とは、感情や感受性やその感覚の鋭さを言うのではない。五感によってただ感じたり気付いたりするだけでなく、「何を、どう感じるのか」ということが問われているのである	独自な定義（説明）
30	片山忠次（1998）	子ども、大人ともに、自分に納得できて、そのことによって生きていく勇気とか希望が湧いてくるように自分を突き動かす「心の中のありよう」が感性	独自な定義（心のありよう）
31	八木一正(1999)	価値を感じ取る能力あるいは役に立つと感じ取る能力	独自な定義（価値、有益への力）
32	野波健彦(1999)	感性は、いろいろなものが有している面白さ、美しさ、不思議さなどに敏感に反応し、気付く感覚	広義な定義
33	梁島章子、他（1999）	物を感じとる力	広義な定義
34	山田善春(2000)	外界の刺激に応じて、知覚・感覚を生じる感覚器官の感受能力であると言ってよい	広義な定義
35	岸井勇雄、他（2000）	感覚器官で知覚した経験を感覚と言い、感覚の生じる力や能力を感受性とよぶことができる。感性は感受性と同意義の言葉	広義な定義
36	阿部明子、他（2000）	さまざまな環境の中で揺れ動きを感じ取る力	広義な定義
37	桑子敏雄（2001）	環境の変動を感知し、それに対応し、また自己のあり方を創造してゆく、価値にかかわる能力	独自な定義（個性的な定義）
38	大嶋一夫(2001)	外界からの刺激を受け取る能力	広義な定義
39	田辺靖子(2003)	音楽を聴いたときに揺さぶられる心の部分	独自な定義（音楽における感性）
40	高須一(2004)	外界物や様々な出来事に対して、主体的にかかわり、自らの思考や想像力等とともに働き、よさや美しさ等の価値を見いだすという能動的な働きとして感性をとらえるべきであろう	広義な定義に新たな意味（価値）を加味
41	臼井博(2004)	外界の刺激に対する感覚器官の感受性、直感的・総合的な理解力	広義な定義
42	速水敏彦(2004)	外界を鋭く察知し、外界の変化に応じた適切で社会的に望ましい感情や欲求を生じさせるもの	広義な定義
43	松本徹（2004）	極端に言えば「感受性」であり、「ものを感じ取る力」	広義な定義
44	中野友三（2006）	様々な対象・事象からよさや美しさなどの価値や心情などを感じ取る力	広義な定義
45	都甲潔、他（2006）	対象に対して直感的に対象の違いを見分ける弁別の能力と、対象に対して評価する能力	独自な定義（個性的な定義）
46	服部一啓(2007)	外界からの刺激をある印象として心に刻み込む働き、能力	広義な定義
47	石本興司(2008)	「感性」という言葉は、感受性という意味の他に、内外界の情報を感受性により受け取り、そこに意味性や関係性を見出しながら、感情やイメージを創出し、さらには表現へと至る創造性を展開していくという一連の過程のことを含んでいると考えられる	独自な定義（詳細な説明）

表１（前ページからの続き）　感性の定義について記述のある著作

No.	著者	定義	分類
48	長南博昭（2009）	感性は真・善・美・聖などの価値を深く感じ取る力であり、一言で言えば「心に感じる力」である	広義な定義
49	木下紗也子（2011）	感覚器官で受容した外界の刺激を、自分にとって価値のあるものとして直感的に選別する能力	広義な定義
50	春野修二（2011）	対象を受け入れる際の在り方	広義な定義
51	布川和彦（2011）	数学の学習における感性とは、理性で摘みつくせない部分のことである	独自な定義（説明）
52	立原慶一（2013）	感性とは意味や心情を知的ではなく、直観的に把握できる能力のこと	広義な定義
53	平田智久（2013）	前頭葉からスタートして行動に至るまでの流れを「感性」と言いたい	独自な定義（行動を付与）
54	中原佳栄（2015）	外界からの刺激を、感覚を通して脳で認知し、感情にいたる一連の流れ、つまり感覚プラス感情のこととする	独自な定義（詳細な説明）
55	文部科学省(2017)	「音楽に対する感性」とは、音楽的な刺激に対する反応、すなわち、音楽的感受性と捉えることができる。また、音や音楽の美しさなどを感じ取るときの心の働きを意味している	広義な定義
56	花輪充、他（2017）	価値あるものに気づき、感じとる心の働き	広義な定義
57	太田雄久、他（2018）	自然の事物・現象に潜む価値あるものに直感的に気付く感覚	広義な定義
58	石田雄太（2019）	感じたことを基に，創造をし，表現していく能力	独自な定義（創造・表現を付与）
59	樋口聡（2019）	視覚、聴覚、触覚、嗅覚、味覚といった感覚能力から発するものである。カンといった形で捉えられる身体知である	広義な定義
60	岩田一馬（2020）	対象に対して多くの思いを巡らせることができる力	広義な定義
61	西原有香莉（2020）	人間の精神が何かを認知する能力	広義な定義

表２　調査した 61 件の文献の感性の定義の分類

⑴広義な定義（45 件）	(1-a) 広義な定義（37 件）	カント（1961）、『哲学事典』(1971)、岡林洋（1985）、石野真（1985）、片岡徳雄（1990）、小林宏（1990）、石川毅(1991）、宮脇理 他（1993）、金子光明 他（1993）、川上昭吾(1994)、井上勝子（1994）、高橋清（1994）、遠藤友麗（1996）、沢田利夫（1997）、高橋史朗（1998）、桝岡寿江（1998）、野波健彦(1999）、梁島章子 他（1999）、山田善春(2000)、岸井勇雄 他（2000）、阿部明子他（2000）、大嶋一夫(2001)、臼井博(2004)、速水敏彦(2004)、松本徹（2004）、中野友三（2006）、服部一啓(2007)、長南博昭（2009）、木下紗也子（2011）、春野修二（2011）、立原慶一（2013）、文部科学省(2017)、花輪充 他（2017）、太田雄久 他（2018）、樋口聡(2019)、岩田一馬(2020)、西原有香莉(2020)
	(1-b) 広義な定義に新たな意味を加味した定義（8 件）	春田正治（1987）、福岡教育大学附属小倉小学校（1994）、筑波大学附属小学校（1997）、新潟大学教育学部附属長岡小学校(1997)、山形県村山市立西郷小学校（1997）、相模原市学校教育研究開発グループ（1997）、石川俾男 他（1997）、高須一(2004)
⑵独自な定義（16 件）	山本正男（1981）、日本教育方法学会（1989）、飯田健夫 他（1995）、黒田耕誠（1997）、L・フェーヴル、 他（1997）、小林美実（1998）、片山忠次（1998）、八木 一正(1999）、桑子敏雄（2001）、田辺靖子(2003）、都甲潔 他（2006）、石本興司(2008)、布川和彦（2011）、平田智久（2013）、中原佳栄（2015)、石田雄太（2019）	

（１-a）「広義な定義」と（１-b）「広義な定義に新たな意味を加味した定義」を合わせた「広義な定義」（１）は 45 件であった。これは全 61 件中 74%となる。

そして、研究者が独自に感性を定義しているものは 16 件、26%であった。

３　本節のまとめ

１．感性に関する著作の定義を一覧にまとめた（表１）。

２．そこで各定義の要約を表１・第４列「分類」のように整理してみたところ、カントの定義、すなわち「広義な定義」を中心に整理できることが明らかになった(表 2)。

３．筆者らの一人川上（1994）が使ってきている定義は「広義な定義」に分類された。

　すなわち、「感性とは、外界の全ての情報に対して感覚と知覚と感情を総合して感じる人間の感じ方の敏感性である。」

４．川上の定義は一般的な定義である。川上が感性の重要性を述べた 1984 年は感性研究の初期であり、その後も実践を重ねている（川上 1994）。川上の定義は継続して使われているので、筆者らは今後の研究においてもこの定義を使っていくことにする。

第２節　感性教育研究の成果と課題

（１）学習指導要領における感性

感性教育は文部科学省が先導したことを先に明らかにした（北川、2020(投稿中)）。

すなわち、1958 年の中学校音楽で感性の教育が初めて触れられた。その後、中央教育審議会の答申で感性は生きる力の要素と位置付けられた(1996)。

小学校学習指導要領（2008）では、感性の育成が音楽と図画工作の目標に掲げられており、それぞれ解説で感性の概念について触れている。

音楽編(2017)では、「音楽に対する感性とは、音楽的な刺激に対する反応」、図画工作では、「様々な対象や事象を心に感じ取る働き」と表現されており、教科に応じた感性の育成を目指している。

音楽・図画工作に限らず、各教科における感性の捉え方を掲げ、感性の育成が意識される必要がある。

（２）感性教育実践の先行研究

感性教育の研究を進めた学校は以下のように多数ある：　福岡教育大学附属小倉小学校(1994)、静岡県御殿場市立御殿場小学校(1994)、新潟大学教育学部附属長岡小学校(1997)、筑波大学附属小学校(1997)、広島大学附属三原小学校(1997)、山形県村山市立西郷小学校(1997)、相模原市学校教育研究開発グループ(1997)、神奈川県相模原市立上溝小学校(1998)、山形県飯豊町立添川小学校(1998)。

このうち福岡教育大学小倉小学校(1994)は、感性が生きる学習過程を「出会う→直接感じ取る⇔ねりあげる→新たに立ち向かう」と提示している。直接体験とねり合いを繰り返すことがポイントとしている。

他の学校も研究に独自性を出している。しかしながら、独自性があるが故に、どこでも誰でも使えるという一般性の観点が不足しているように思う。

川上昭吾・中村正雄(1994)の場合は、上に紹介した学校の報告と異なる個人の研究で、感性育成を目指した生活科の学習指導と評価の研究を進めている。ここでは、感性は環境からの刺激で育つので、学習指導要領に準拠して体験活動を系統的にまとめ、教育活動全般で感性教育に取り組もうとしている。この研究は筆者の研究目的と一致するが、その後研究報告はされていない。

2020 年に岩田一馬は小学校図画工作で感性についての研究を発表しているが、これが最近の実践研究である。

全教科を担任する小学校の教師が全教科で感性教育をどのように進めたらよいか実践理論を具体的に示す必要がある。

第３節　感性教育の進め方

（１）　感性教育と教科教育との関係

先ず、感性教育と各教科との関係を明らかにしておきたい。

それは図１のように示すことが出来よう。

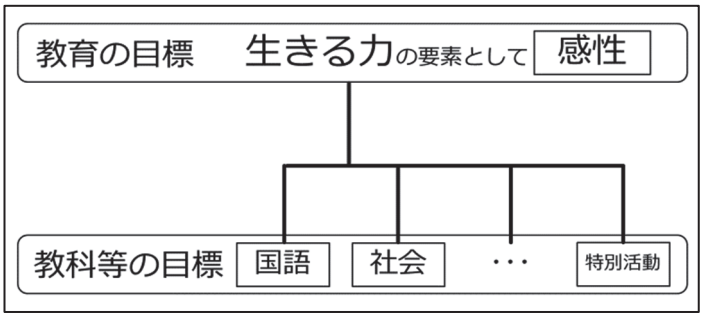

図１　感性教育と教科等の目標との関係

つまり、感性教育は各教科の上位に位置する。日々の授業においては教科の目標が意識されて、感性教育の目標が意識されることがない。したがって、感性を育てるという上位の目標を教科の目標のレベルにまでどのように引き下げたらよいかという問題が生じる。

（２）目指す子の像

感性教育を進めるにあたって先ずは目指す子の像を決めておきたい。

それは次のようである。

・事象に感動し、自ら調べたい、やってみたいという気持ちをもつ子

・固定観念にとらわれず、事象からたくさんのイメー

ジを広げられる子
・新しいアイディアを生み出す子。新たな視点から創造的な考えを導き出すことができる子
・事象や友達に共感できる子
・自分の感じたことを豊かに表現できる子

これらの子ども像は、新学習指導要領が目指す目標と一致していると思われる。

（３）感性教育の方法

目指す子ども像を育てる方策は以下に示すようにしたいと考えている。

① 感動する場面を与え、心を刺激する

感性教育は、「外界の全ての情報に対して**感覚**と**知覚**と**感情**を総合して感じる人間の感じ方」を育てるのであるから、感覚、知覚、感情を刺激する体験、いうなれば「感動体験」を与えることが必要となる。すなわち、各教科とも子どもたちが「あっ」と感じる感動体験を与えることこそが感性教育を進める方法であるということになる。

これがポイントとなる。

さらには感動体験で感じた子ども自身の「あっ」を、子ども自身が「大切な発見なんだ」と捉えられるようになっていくことも大切である。

② 初めての体験を取り入れる

見たことがないものを見る機会、触ったことがないものを触る機会、したことがないことをする機会、聴いたことがないものを聴く機会、嗅いだことがない臭いを嗅ぎ、味わったことがない味を味わう機会は、子どもたちにとって新鮮であり、多くのことを感じとる機会となる。また、その体験がより良いものに触れる機会となるのであれば、より豊かな感性を磨く機会となるであろう。

③ 直接体験をさせる

直接体験は、五感を使い、たくさんのものを感じ取ることのできる機会となる。群馬県の下仁田町立小坂小学校（1997）では、花いっぱい活動や野鳥タイムを取り入れ、子どもが繰り返し自然事象に触れ合える環境を整えていた。

すべての教科等において、直接体験の機会を生かしたり、体験できる場を設けたりすることが大切である。

④ 子どもの自主性を尊重する

感性は与えられた環境の中で育つのではなく、子どもの自主的な学習活動を通して育つものであろう。

ペスタロッチ(1965)は「子どもたちを自然に中に連れてゆけば、子どもたちの目や耳は先生に対するよりもより見開かれるであろう」という趣旨の説明をしている。

感性教育のためには、可能な限り自主的な学びを保証していきたい。

⑤ 感じたことを表現する機会を設定する

感じたことを表現することで、感性は研ぎ澄まされていく。音楽家が音楽に対する感性が鋭いことは天性のものがあるとともに繰り返し音楽に接しているからである。科学者についても同様なことが言える。子どもでも感じたことを表現するという繰り返す活動で感性が身についていくであろう。

詩、作文、感想文、絵、発表、話し合い、歌、ダンスと表現する方法はたくさんある。子どもたちの伝えたい内容に合わせて、表現方法を選択させ、感じたことを伝える方法を子どもたちに習得させたい。繰り返し表現し、また友達の表現を知ることで、自分の表現方法を振り返り、表現力を磨くことができる。

（４）各教科における指導例

音楽教育の分野は感性教育の先達で、研究が進んでいる。小学校学習指導要領解説音楽編（2017）で「音楽に対する感性は、美しいものや崇高なものに感動する心を育てるのに欠かせないものである」としている。つまり、「感動場面を用意すること」が示唆されている。

このことを教科の教育で具体的に考えてみよう。

例えば、２年生の国語で「たんぽぽのちえ」の学習がある。校庭でタンポポを観察させてから、教科書の説明文に入る。こうすれば、タンポポへの親しみがわき、説明文が実感を伴って理解できる。それにより、タンポポの生きるための工夫に対し、驚きや感動を覚えさせることができる。

社会では、６年「江戸の社会と文化・学問」で伊能忠敬の業績について学ぶ場がある。伊能忠敬が自ら歩いて測量した地図を用意し、それと現在の地図と比較するとほぼ一致することがわかる。簡単な道具だけ用いて歩いて作ったにも関わらず、正確な地図を作成できたことに子どもは心を打たれると思われる。この体験が大切である。

家庭科の場合、５年「食べて元気、ごはんと味噌汁」では、味噌汁の実習がある。この単元では、「お気に入りの出汁を見つけよう」という活動を設定し、鰹節、煮干し、こんぶ、和風だしの４種の出汁を飲み比べさせる。子どもたちの感想からは、匂いと味の感想に加え、「うちの味だ！」という家庭で得た体験から出る言葉も出てくるであろう。このように心が揺さぶられ、知識と体験が結びつくような場面の設定が肝要と考える。

授業を行う際は、感動的な体験の場がある授業の指導案に感性教育の目標を並列的に書き込むことになる。

以上数教科の例を述べたが、各教科における感動場面がある感性教育の指導ポイント例は表３のように考える。

表３　各教科等の感性教育の指導例

教科	授業例
国語	体験をさせて説明文に入る。例えば、「たんぽぽのちえ」では、校庭(野原)でタンポポを観察させてから教科書の説明文に入る。
社会	社会的な事象の体験や歴史的事実に触れることを通して学習させる。例えば、伊能忠敬が実際に歩いて測量した地図を見せ、現在の日本地図と重ねる。
算数	数や量を、体験を通して学習させる。例えば、速さの単元では、おもちゃカーでレースをし、速さを実感させる。
理科	自然の事象を、体験を通して学習させる。例えば、昆虫の羽化の観察をして生命誕生の感動を味わわせる。
生活	自然の事物や社会的な事象を体験する場面を大切にする。例えば、ウサギの体温や心臓の鼓動を体感させる。
音楽	様々な音楽に接してそれぞれの特徴をとらえる。例えば、表現や鑑賞の学習で感動場面を取り入れる。
図画工作	様々な対象や事象に接しさせる。そして、それぞれの良さを感覚でとらえることを大切にする。
家庭	家庭科は味覚を使う唯一の教科である。味噌汁づくりで出汁にもいろいろな種類があることを知り、味を比べる。
体育	表現運動で心を大切に表現させたい。題材として、十分味わった国語の物語教材や「運動会の騎馬戦」など身近な体験を取り上げる。
外国語	英語で伝える喜びを体験させる。世界のおすすめスポットを、写真を見せながら英語を使って紹介させる。初めて知る文化にも興味を持たせたい。
道徳	共感や感動しやすい資料や、学校行事や身近な体験とリンクさせた資料を選び、子どもたちの実感を伴う展開で進める。
総合的な学習	教科を越えるテーマを発見し、自ら学び、自ら追及するようにさせることをねらう総合の時間は、子どもの感性を出発点とする考え方で進めていく。
特別活動	お掃除名人や花咲かせ名人等、地域の人材を活用することで、活動意欲を高める。

（５）感性教育の評価

国立教育政策研究所の「学習評価の在り方ハンドブック」(2019)には、感性の評価について触れられている。感性は、観点別評価や評定にはなじまず、こうした評価では示しきれないことから個人内評価を通じて見取ると記されている。感性を評価することは、感性を評価する教師の影響を受けることもあり、観点別評価や評定で評価することはなじまないかもしれない。しかし、感性の評価が個人内評価のみになったり、教科に下ろすことなく漠然と育成の必要性を感じたりしているだけでは、感性を育てることが教師に意識されないであろう。

感性教育の指導のポイントは「感動体験」であるから、評価は子どもが感動を表出した場面を指導者がキャッチすることに尽きる。そして、そういう場面に遭遇したときに、「すばらしい感じ方だねとか、気づきだね。」と共感するようにしたい。

さらに、可能な範囲で感動をメモさせ、心の動きを記録として表出させる。したがって、心の動きをメモさせる方法を考案する必要がある。あっと感じたことをメモするメモ用紙や、授業に対する「気持ちレベル表」のようなものを用意したいと考えている。

評価についてさまざまな手立てを講じたにしても、子どもの心の動きをとらえきれるものではない。そのことを踏まえて、「感性が育ったかどうかは短期間で見定めることは困難として、感動的な活動場面があったから感性が育っているはず」と筆者らの一人川上(1994)は述べているが、この考え方は感性教育には大切なのではなかろうか。実践にあたって「感動があったから感性は育っている」と考えていくことにする。

おわりに

童謡「おぼろ月夜」には「菜の花畑に入日薄れ　見渡す山の端かすみ深し　春風そよふく空を見れば　夕月かかりて匂い淡し」とある。ここには作詞家高野辰之が感性でとらえた春の情景がある。これに岡野貞一が曲をつけて名曲が生まれている。この曲は日本人の感性と共鳴して長く歌い続けられるようになった。このような感性を子どもに身に付けさせたいものである。

また、日本には俳句という文化がある。俳句には季語がある。季語は日本人の感性が発揮されてきた。ところが、体験不足から季語がなじまなくなっている気配がある。たとえば、含まれる漢字から「小春日和」を春の季語と、「麦秋」は秋の季語と間違いそうである。このままでは俳句という文化がすたれてしまいかねない。

俳句だけの世界ではない。僧道元は「春は花　夏ほととぎす秋は月　冬雪さえてすずしかりけり」と四季を簡潔に表現している。ここにも道元の四季の変化に対しての感性の鋭さを認めることができる。

感性は、人としての生存の基盤である(中村雄二郎、1975)。

感性の枯渇を起こさせないために、感性教育を実践に移し進めていきたいと思う。

感性は特別感動的な授業だけで育てるのではなく、常日頃の一つ一つの学習でも育てていくべきものと考える。それには、なによりも教師が感性を意識し、教師が感性豊かであらねばならないと考える。

子どもにとって、観察した事実を友達に話すのは比較的簡単であるが、自分の心情を話すのは少し勇気がいることになる。何を言っても認め合える学級づくりをしていくことが感性教育のために大切なことであろう。

以上のように考えて今後は各授業を実践していきたいと考えている。

追記

本論は全体を北川が執筆した。川上はその点検をした。

文 献

阿部明子・竹林実紀子（2000）『表現 感性と表現に関する領域』東京書籍.

飯田健夫・柳島孝幸・山崎起助・羽根義・渋谷惇夫(1995)『感じる: こころを科学する』オーム社.

飯豊町立添川小学校、山形県(1998)、教育ジャーナル「特集 感性の開発・今、学校で」、36(10) 、pp. 6-12.

石川佾男 他（1997）『感性豊かな子どもを育てる道徳教育の創造』文京書院.

石川毅(1991)「感性の吟味」『美術教育学：美術科教育学会誌』12、23-33.

岩田一馬(2020)「色、形に対して感性や想像力を働かせることのできる児童の育成―小学校図画工作における具体物、ワークシートの工夫を通して―」『愛知教育大学教育実践研究科(教職大学院)修了報告論集』11、131-140.

石田雄太(2019)「小学校低学年における感性を育むための教師の役割 ：「ひょうげん領域」の実践を通して」『信州大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻（教職大学院）実践研究報告書抄録集』、25-28.

石本興司(2008)「感性教育としての『身体表現ワークショップ』--新たな学びの形を求めて（『身体表現ワークショップ』の大学教育における意義について）」『同志社女子大学日本語日本文学』20、102-119.

石野真（1985）「美術教育における感性」『美術教育』249、22-27.

井上勝子他著（1994）『からだによる表現 子どもの感性と創造力を育む』ぎょうせい.

臼井博(2004)「子どもの感性をみがく」『教育展望』50(5)、18-23.

遠藤友麗（1996）『美術科の授業をどう創るか』明治図書.

大嶋一夫(2001)「物理現象を身近に」『物理教育』49(１)、53-54.

太田雄久・粟生義紀・秋吉博之（2018）「子どもの感性を育てる小学校理科授業の実践とその効果の検証」『理科教育学研究』59(1)、1-10.

岡林洋（1985）「美術教育における感性と視覚性」『美術教育』249、16-21.

片岡徳雄(1990)『子どもの感性を育む』日本放送出版協会.

片山忠次（1998）「幼児の感性を育む」『モンテッソーリ教育』31、28-34.

金子光明、松島俊夫、三沢庸助、西沢一夫、赤羽貴久、木村寛(1993)「算数・数学科における感性の一考察」『宇都宮大学教育学部教育実践研究指導センター紀要』16、164-173.

川上昭吾(1984) 『地域の自然を生かした理科指導』明治図書.

川上昭吾(1994)「新しい学力観に立つ学力と子どもの感性」、所収『新しい学力観に立つ理科の学習指導と評価』（角屋重樹・川上昭吾編）17-27、明治図書.

川上昭吾・中村正雄（1994)、「感性育成を目指した生活科の学習指導と評価の研究」、愛知教育大学教科教育センター研究報告(18)、pp. 225-236.

カント（1781）篠田英雄（1961）訳『純粋理性批判（上中下）』岩波書店.

岸井勇雄・小林竜雄・高城義太郎・杤尾勲（2000）、『感性と表現』チャイルド本社.

北川祥子(2020)、「感性教育研究の動向」、日本教科教育学会誌（投稿中).

木下紗也子（2011）「音楽科の学力としての感性育成を目指す授業構成による実践の検証」『学校音楽教育研究』15、112-113.

小林宏（1990）『直感から直観へ 感性学入門―感性を強くゆたかに』、産能大学出版部.

小林美実（1998）「感性は、いつ、どこで、誰によって、どのようにみがかれるのか」『教育と情報』486、6-11.

黒田耕誠（1997）「力動的人格体制に位置づく感性とその評価」『現代のエスプリ』365：126-131.

桑子敏雄(2001)『感性の哲学』「日本放送出版協会.」

国立教育政策研究所（2019)、『学習評価の在り方ハンドブック』、国立教育政策研究所教育課程研究センター発行.

御殿場市立御殿場小学校、静岡県(1994)、「「感性」を軸とした社会化問題解決学習を構想する（勝又明幸報告)」、現代教育科学 37(5) 、pp. 14-17.

相模原市学校教育研究開発グループ（1997）『感性ってな～に！：子どもを育む・キーワード』日本教育新聞社出版局.

相模原市立上溝小学校、神奈川県（1998)、「感性って何だろう、どう磨くのだろう（桝岡壽江報告)」、教育ジャーナル 36(10)、pp. 13-17.

速水敏彦(2004)「子どもの感性を豊かに磨く」『教育

展望』50(5)、34-39.
沢田利夫（1997）「感性をどう評価するか」『現代のエスプリ』365(12)、119-125.
下仁田町中小坂小学校、群馬県(1997)、「日常化に迫る教育実践を核として（今井規雄報告）」、学校運営研究 36(2)、pp. 22-23.
高須一(2004)「[生きる力]と豊かな感性や情操をはぐくむ教育」『初等教育資料』785(12)、2-7.
高橋清（1994）『感性を育てる音楽鑑賞の授業』紀伊国屋書店.
高橋史朗（1998）「感性をはぐくむ学校教育」『学校運営研究』37(2)、66-69.
立原慶一（2013）「題材「クロード・モネ作『日本風太鼓橋』の鑑賞」（中学１年生）における鑑賞能力の調査研究 ： 感性と知性の働きをめぐって」『宮城教育大学紀要』48、149-158.
田辺靖子(2003)「豊かな感性を育てる鑑賞活動--主体的に聴き、音楽の豊かさに気づくようになるための授業展開の工夫」『教育実践総合センターレポート(大分大学教育福祉科学部附属教育実践総合センター)』22、70-84.
長南博昭(2009)「子どもの感性を解発する「四体験」」『教育と医学』57(1)、64-69.
筑波大学附属小学校（1997）「感性を豊かにする指導法の究明」『現代のエスプリ』365(12)、132-140、至文堂.
都甲潔・坂口光一(編)（2006）『感性の科学』朝倉書店.
デカルト(1649)、谷川多佳子（翻訳)(2008)『情念論』、岩波文庫.
中原佳栄（2015)「感性を豊かに働かせる図画工作科学習指導の研究」『福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻(教職大学院)年報』5、111-118.
中野友三（2006）「教育実践報告 人間性、感性、創造性を育てる」『比治山大学短期大学部紀要』41、129-135.
中村雄二郎(1975)『感性の覚醒』、岩波書店.
西原有香莉(2020)「自ら課題をつくり出す力の育成 ： 感性的な自己内対話の充実より」『和歌山大学教育学部付属小学校紀要』43、78-85.
日本教育方法学会（1989）『新教育課程と人間的感性の育成』明治図書.
新潟大学教育学部附属長岡小学校(1997)「子どもが問い続ける授業―感性を生かして」、現代のエスプリ（至文堂）365 号：150-159.
布川和彦（2011）「数学の学習における感性」『日本数学教育学会誌』93(2)、50.
野波健彦(1999)「幼稚園教育 自己表現を楽しむ--豊かな感性と表現の育ちに向けて」『初等教育資料』705(6)、82-88.
服部一啓(2007)「主体的に学び、豊かな感性を育む書道教育--部活動での臨書指導実践を通して」『福岡教育大学紀要』5(56)、15-26.
花輪充・川合沙弥香（2017）「岡田陽が探究した芸術教育の意義:豊かな感性の育成を目指した演劇教育に着目して」『東京家政大学博物館紀要』22、11-30.
春野修二（2011）「美術科教育をめぐる感性・感覚・感受性の共通性と差異」、『美術教育学』32、371-380.
春田正治（1987）「感性を育てる、ということは」『教育と医学』35(10)、952-958.
林達夫(編)（1971)『哲学事典』平凡社.
樋口聡(2019)「感性教育論の展開(2)感覚・感受性」『学習開発学研究』12、3-12.
平田智久(2013)「「感性の豊かさを育てる」とは?「感性」の意味　平田流解釈」『幼児の教育』112(4)、17-20.
広島大学附属三原小学校(1997). 高橋史朗、「自分探しの旅」と創造的自己実現活動」、学校運営研究 36(7)、66-69.
フェーヴル、L、 他（1997）、小倉孝誠／編集、大久保康明／〔ほか〕訳、『感性の歴史』、藤原書店.
福岡教育大学附属小倉小学校(1994)『子どもの感性が生きる授業づくり』明治図書.
ペスタロッチ(1965)、梅根悟訳『政治と教育―隠者の夕暮れ他―』、明治図書.
桝岡寿江（1998）「感性って何だろう、どう磨くのだろう」『教育ジャーナル』36(10)：13-17.
松本徹（2004）「豊かな感性や情操をはぐくむ授業の創造」『初等教育資料』785(9)、12-15.
宮脇理 他（1993)『感性による教育の潮流―教育パラダイムの転換』国土社.
村山市立西郷小学校（1997）、「感性を育てる魅力的な教材の開発と単元構成の工夫」『現代のエスプリ』365(12)、160-168、至文堂.
文部科学省(1996)、「中央教育審議会答申　２１世紀を展望した我が国の教育の在り方について」.
文部科学省(2017). 小学校学習指導要領解説、音楽編及び図画工作編.
八木一正(1999)「生徒の「感性」を高め、 物理嫌いを減らす試み」『物理教育』47(3)、109-124.
山田善春(2000)「ボランティア活動による科学教育と「感性」教育」『物理教育』48(1)、69-70.
山本正男（1987）「美術教育における感性」『美術教育』255、40-43.
梁島章子・小林洋子・大森幹子・島地美子・倉持洋子（1999）『感性と表現のための音楽』、学術図書出版社.